

残り時間5秒の奇跡。 無心で放った逆転の面打ち

財前政樹

平成6年9月11日。この日、九州産業大学では第41回全九州学生剣道大会が行なわれていた。熱戦が続いた大会はついに決勝戦を残すのみとなっていた。決勝で剣を交えるのは、優勝候補の一角鹿屋体育大学を準々決勝で下してきた九州産業大学と、当時3年生の財前政樹を大将に据える鹿兒島大学であった。

国立大であるがゆえ、鹿兒島大には剣道による推薦制度はない。部員には初心者も多く、当時は日常的に稽古に訪れる専門的な指導者すらもいなかった。高校時代に実績のある選手は財前を除いては、ほぼ皆無の状態。ともすれば、剣道への意欲が削がれてしまいがちな環境であったが、剣道部員たちの剣道への情熱は薄れることはなかった。日々の猛稽古はもちろん、鹿屋体大、鹿兒島県警などへの出稽古など、学生自身が主体となって修練に励んだ。

努力の日々を経て迎えた九州大会。決勝戦の開始を待つ間も会場はざわめきに包まれていた。それもそのはずである。鹿兒島

大が決勝戦の舞台に立つのは、実に36年ぶりの偉業となるからだ。この日、決勝戦までの道のりで、鹿兒島大は準々決勝の九州大学戦、準決勝の福岡大学戦とすべて大将戦を制しての薄氷を踏む勝利。その勝負をすべて財前が制していた。

決勝戦、鹿兒島大は先鋒戦で二本勝ちを取め、幸先の良いスタートを切った。しかし続く次鋒戦を九産大が一本勝ち、その後の五将も二本勝ちで、鹿兒島大を突き放す。副将戦を終えた時点でのスコアは3（7）―3（5）で九産大のリード。大将が引き分ければチームの負けが決まる。勝負の行方は、またしても財前に託されることとなった。

主審の合図とともにスツと立ち上がった財前。素早く間合を詰めると、いきなりの小手面に出る。虚を突く先制攻撃のはずだった。しかし、相手はこれをいち早く察知し、財前の技に合わせる形で面。手痛い先制打を許してしまった。しかし、「当然、心の中には焦りもあったんですが、

それでも「絶対に取れる」という気持ちのほうが強かったです」
その後も財前は必死に攻め続けるが、一本奪い返せないまま、試合時間はすでに4分を経過した。試合を見守る鹿兒島大陣営からは財前に向かって、「時間がないぞ!」という叫び声が飛ぶ。

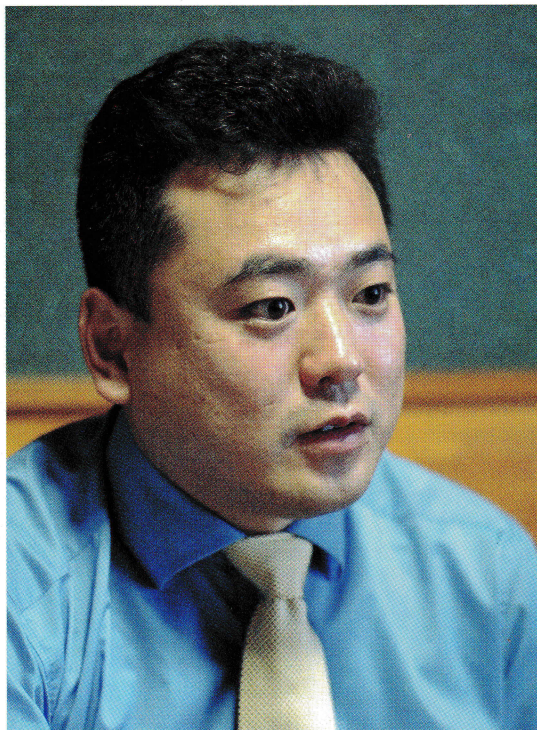
面に跳んだ財前に相手は迎え突きて応戦。財前の喉元に竹刀が突き刺さり、面が外れた。財前が面を着け直すために試合は一度、中断となる。事態は依然として絶体絶命。しかし不思議なことに財前の心は落ち着いていたという。

試合が再開される。相手も残り時間を気にして、財前が打ち間に入った途端にすばやく間合を切って逃げ切ろうとする。何度か同じような展開が続いた時、ここまで後退することの多かった相手がふいに前に出てきた。その瞬間、財前の身体が前に跳んだ。鮮やかな面が決まった。

歓喜に沸く鹿兒島大陣営。しかし優勝するためにはもう一本奪わなければならない。残り時間はもうあとわずか。

主審から「勝負」の声がかかると同時に財前は大胆に間を詰める。財前の気迫に押され、相手はのけぞるように体勢を崩した。「ここだ」と思った瞬間、すでに身体は前へと跳んでいた。財前の放った打突は吸い込まれるように決まった。試合時間は4分55秒が経過していた。奇跡のような逆転劇で鹿兒島大は36年ぶりの九州制覇を果たした。

「子供の頃から『相手がひくところは打つべき機会』と教わってきました。その機会を優勝を決める最後の一本でとらえることができた。狙って打った技ではないです、無欲だったから打ったんだと思います」



いぜんまさき 昭和46年11月29日生まれ、五段。岐阜県立岐阜高校から鹿兒島大学へと進学する。大学卒業後、教員として鳳凰高校に勤務。同校剣道部を全国でも上位に進出する強豪校へと育て上げる。主な実績として高校時代に岐阜県春季大会優勝、国体出場（3年時）。大学時代に全日本学生優勝大会出場（2、3年時）、全日本学生選手権大会出場（2～4年時）。教員として全国教職員大会3位（団体戦）、全日本都道府県対抗大会出場などがある。（写真◆窪田正仁）

ホームページ上で活動報告 鹿児島県外からも入部者が急増中



ざいぜん まさき
財前政樹
鹿児島県鳳凰高等学校
剣道部監督



今年是新1年生が5名入部（4月7日現在）。ホームページを見て興味を持ち、福岡や山口から入学してきた選手もいる
鳳凰高校女子剣道部ホームページ=<http://www.hooh.ed.jp/kendo/index.html>

本校の女子剣道部員たちは、普段の学校生活を過ごしながら、わずかな部活動の時間を使ってセンバツ、インターハイ出場をめざしています。高校生の「体育系部活動所属離れ」が目立ちはじめている中で、剣道に高校生活を捧げているのです。そんな生徒たちの誇りある青春を幅広く紹介したいと思い、本校女子剣道部のホームページの中に、オリジナル写真をつづったオリジナル新聞を掲載しています。

ホームページ用のオリジナル写真撮影に当たっているのは、本校職員の濱辺芳尚先生です。「女子剣道部の選手の活躍と感動を全校生徒、職員に伝えたい」と全国各地で写真を撮ってくださいました。また、大会での写真を本人に見せることで「あなたはこのなにがなばっているんだよ」「もっと精進してほしい」というメッセージを伝えるためにシャッターを押してくださいさっ

ているそうです。部員たちにホームページ掲載の反応を聞いてみると「写真で自分たちの姿が保存される、普段の学校生活や部活動の雰囲気が見える」「おのずと目標に向かっての気持ちが高ぶる」「よりいっそうチームが団結する」という声があがっています。保護者の方々からも「校務多忙にもかかわらず、写真撮影に向いてくださる学校側の配慮に感謝している」との声が多数寄せられています。

親元から離れて寮生活を送っている部員たちのご両親は、「インターネット上で娘ががんばっている姿を見て『娘は元気ががんばっているんだな、親である自分もがんばるぞ！』と元気になる」そうです。こういった想いが新たな活力となって「剣道部運営にもっと尽力していきたい」という原動力となり、部活動運営、監督の指導方針

などに理解が深まり、保護者会の自主的活動も活発になっています。

世間一般では、剣道人口減少が問題視されています。しかし、画像を公開した当初から、メールによる投稿、感想、質問が多数寄せられたことを考えると、世間の剣道に対する関心はまだ弱まっていないなと思います。

過去には鹿児島県出身の生徒だけで構成されていた本校も、現在は部員の半数である9名が県外出身者です。遠くは兵庫県や鳥取県からも入学しています。在籍している先輩の紹介で後輩が入学してくる例は多数あると思いますが、まったくつながりがない地域から入学してくれた部員もいます。インターネット上の画像が中学生の心を動

かし、夢を与えているといっても過言ではありません。

今後も教師としてこれまで以上に大きく成長しつつ、稽古はもちろん、写真とインターネットなどを使って多くの夢を部員たちに与えられるように精進していこうと思っています。生徒たちが自己の目標達成に向けて、ひたむきに努力することの大切さ、すばらしさを知り、自分を支えてくれる人々に感謝し、出会いを大切に、協力連帯という絆と心を教育していく所存です。

高体連のひろば